

話をおこなうものが増加している傾向がみられた。とくに 20 歳代と 30 歳代を境にして大きな断層がみられていた。

友人などの身近なものと性に関する会話をするという意味は多岐にわたる。性に関するタブー視が薄れたという意味づけ、性に関してオープンになったという意味づけ等は、従来しばしばなされてきたものである。別の観点からすれば、タブーが薄れ、オープンになったということは、大切にしまっておいたものを表に出すということであり、そこから読みとれることは、性が「大切なもの」ではなくなった、すなわち、性の優先順位が低下した（もしくは優先順位の高いものを喪失した）という意味づけが可能である。そこには、思想家である竹田青嗣がいう「エロス」が生み出される可能性は低くなり³⁾、うがった見方をすれば、それが昨今指摘される性への関心の低下とパラレルの関係にあるともいえるだろう。これらについては、30 歳未満と以下のものたちの性的活動の活発さの差異、あるいは、研究班のテーマである男女のコミュニケーションの差異をみることにより、ある程度の示唆は得られると思われる。従来は、性がオープンにされるということは、伝統的な規範からの解放という視点から研究分野においても歓迎される傾向にあったが、今日では、それがエロスの喪失に関連している可能性があり、より注意深い研究が望まれるようになったということでもある。

文献

1) 山地佳代, 白石裕子, 松浦賢長: 家庭における性教育の可能性に関する研究? 女子高校生とその母親との関係および性に

関する会話についての質問紙調査より? . 43 (4): 549-554, 2002.

2) Zamboni BD, Crawford I, Williams PG: Examining communication and assertiveness as predictors of condom use. AIDS Education and Prevention, 12(6): 492-504, 2000.

3) 竹田青嗣. エロスの世界像. 東京, 三省堂, 1993, 59-67.

要約

男女の生活と意識に関する調査から、とくに性に関する会話に関する質問をとりあげて、親子間などで現在、性に関する会話がどの程度なされているのかについて分析をおこなった。結果:(1) 大多数の対象者は、各年齢群を通して、親とは性に関する会話をほとんどしなかった、もしくは、まったく話をしなかった、と回答していた。男性では年齢層があがるにつれ、まったく話をしなかったと回答するものの割合が高くなる傾向がみられたのに対して、女性では 20 歳代後半以降は、その割合は約 50%と一定していることがわかった。(2) 親が性に関して厳しかったと回答したものに着目してみると、男性においては、厳しかったと回答したものの割合は数パーセント台にとどまっているのに対し、女性においては、その約 2~3 倍の割合で、厳しかったとの回答がみられていた。どちらともいえない、との回答をしたものの割合は、男性では約 40%、女性でも約 38%と大きな差がみられなかったが、20 歳未満群の女性において、どちらともいえないと回答したものが 60%に達していることがわかった。(3) 友人などの身近な人と性に関する話をよくすると回答し

たものについては、男性に着目すると、20歳代と30歳代のあいだに断層がみられた。30歳未満の対象者では、友人などと性に関する会話をするというものが大幅に増えているのがわかった。この傾向は、女性では20歳未満に顕著であった。(4)セックスはいつから始めてよいかの質問に対して、

本人の自由と答えたものに着目してみたところ、本人の自由と答えたものは、男性では20歳代以下に多くみられる一方、女性では、年齢が下がるにつれて激増していた。とくに20歳未満については、3人に2人という高い割合で、本人の自由、が選択されていた。

コミュニケーションの問題設定におけるカテゴリーの検討

堀 成美（東京学芸大学）

（Ⅰ）男女の性の健康に関するコミュニケーションの問題を明確にし、（Ⅱ）とりくむべき課題や実践の方向性、（Ⅲ）および効果が期待される分野の選定のため、先行研究/実践のカテゴリーを整理する。

1. コミュニケーションを規定するもの

コミュニケーションは、個人と個人、あるいは個人とメディアなど、コミュニケーションの主体となる人や媒体の接点＝「インターフェイス」における情報や意図のやりとりである。

コミュニケーションそのものには目標があり、そこには意図が存在する（1991、池田・村田）。また、他者との関係性も影響する。男女のコミュニケーションの問題を検討する際には、こうした目標や意図をもつ「男性と女性の間でおこる実際の情報や言葉のやりとり」と、「コミュニケーションに影響する因子とその影響の仕方」という二つの視点をもつことが重要である。

ここでは、コミュニケーションを規定するものについてキーワードの抽出とカテゴリー化を試みたい。

2. 男女のコミュニケーションを規定するもの

男女のコミュニケーションは1対1の情報やりとりであるが、ある会話および反応に影響するものはすでに獲得している所属集団の価値基準の影響を受ける。価値基準は時代や地域・文化によって多様であるが、特にそれぞれの性役割モデル、期待される発達モデルとして存在する。これらは Norm、またジェンダーの問題として語られるが、男女のコミュニケーションの障害がそこにある場合介入がむずかしい。

1) Norm

その文化で性的な問題はどのように扱われているか。否定的な側面・肯定的な側面はどのように分類されるのかを知ることは男女のコミュニケーションの問題に介入する際の手がかりになる。また男女のコミュニケーションを支援していく専門家自身もまたこの Norm とともに生きており、この分野で行われている態度調査は性の健康に関わる専門職育成の際にも重要な側面になる。

たとえば、米国のカリフォルニア大学サンフランシスコ校エイズ予防センターのシンシア・ゴメス教授は Changing the Norm を提唱する。

コンドーム使用促進に関わる際にネックになることは、避妊に経口避妊薬を使用することがポピュラーな地域の場合、コンドームは性感感染症予防という側面がクローズアップされる。性産業をイメージする機会が多いため、コンドームにアクセスすることや使用することそのものがスティグマになる場合がある。このような状況でコンドーム使用を一般によびかける場合は、「夫婦や恋人とであっても」（究極的には子づくり以外は）コンドームを使用する、という新たな価値基準を提案していく必要がある。また、カトリックがマジョリティの地域では、教義とコンドーム使用について矛盾する際、教育メッセージとして妥当性をもつためには何らかの新しい解釈、表現方法が必要になる。これまで価値としていたところに修正を加える、あるいはあらたな価値を提案していくとい

うことが必要と指摘されている。

2) ジェンダー

女性らしくあること、男性らしくあることというものは各文化によって異なるが、たとえば、南米では「強くたくましい男性像」として、コンドームをつかわないセックスが「リスクをおそれない」マッチョなモデルとしてされてしまう。また東南アジア地域では結婚前に男性がより多くの性体験をもつことが評価される。反対に女性は結婚まで処女でいることが重視され、結婚後はより多くの子どもを妊娠出産することが奨励される。日本においても「メディアにおける性とジェンダーの描写に関する研究」

(2000, 東)、「日本の若者の性と保健行動の研究」(2000, 徐)

らが性の健康に関連する行動の背景にあるジェンダーの問題を指摘している。これもまた新たなモデル・価値基準の提案が必要という指摘がなされるものが多い。

上記1) 2) は問題構造を明らかにする上で重要な視点であるが、実践報告的なものが多く、3) の政策・プログラムへと具現化するための基礎調査的な位置づけにとどまる。

3) 政策/プログラム

1) 2) のような問題を指摘する研究や文献は少なくないが、これらを何らかの対策として位置づける場合に「政策/プログラム」がキーワードになってくる。この分野の文献は公式文書が中心で、政策の根拠となっている保健医療統計数字、および実際にどの程度の規模で実践されているかを知る予算およびその推移が把握しやすいため、取り組みの方向性・規模を提案する際に参考になるものが多い。政策やプログラムを決定・運営する主体は、自治体や国レベルが発表しているナショナルプラン的なものから、国際専門機関の推奨レベルまで多様であるため、文献の性格、個々の政策の背景にある価値や採用する際の文化的基準がどのようなものであるかという検討が必要であるが横断

的な比較研究は少ない。

4) 学校教育

性の健康問題を改善するための取り組みとして、サンプルとなりやすいものに学校における性教育や感染予防教育がある。この領域では規模や分析レベルもさまざまな「実態調査」モデル授業などの「実践報告」が数多くあるが、新たな提案にふみこむためのエビデンス提示という意味で影響力やインパクトが弱いものが多い。また、多くは文献検索システムにのらないものであるため、横断的な検討が難しい領域である。

今後の方向性を検討する際に参考になるのは、地域や国がどのような内容でどのような対象に教育や情報の提供を行っているか、どのようなかたちで情報アクセスを対象に保障しているかという視点で、「公教育において性教育やその内容はどのように位置づけられているか」といった分析が有効と思われる。たとえば、この学校分野の実践と、保健医療分野の統計を合わせ、実際にどのような介入を教育分野で行うと、意図しない妊娠中絶の件数や性感染症サバイランスデータの改善につながるのかという文献が提示可能であれば政策を提案する際の有効な資料となると思われる。

5) 専門家の態度

性の健康問題にかかわる専門職の態度は、教育やサービスを利用する対象の保健行動に影響するため、教師や医療者を対象とした態度についての調査研究が存在する。また、研修プログラムの効果評価研究、実践報告も行われているため、問題解決のための提案を最終年度に行う際には、予算化とあわせた検討が必要になると思われる。しかし、アンケート的なものを書き並べるものから、実際に獲得すべき学習目標・ゴールを明確にし、その達成度を評価する構造的なアプローチをとるものと、その実践・報告範囲は幅広いいため、本研究でめざす性の健康についてのコミュニケーション問題の改善、

レベルの向上に資する研修およびそのコンテンツはどのようなものかを明らかにするためには、サンプルとなる研修を開発しその有効性について検討されるべきかもしれない。

6) コミュニケーションスキル

1) 2) をふまえ、3) で予算化されたものが4) で実践されるときに、具体的に扱われるもののひとつにコミュニケーションスキルがある。WHO が提唱するライフスキルのモデルにあるように、発達段階にあわせたスキルの獲得を教育プログラムに取り入れていくことは重要である。この領域では「実践報告」が多くその効果評価を横断的に検討することに課題が残

る。

7) メディア

1) 2) および個人が入手する性についての情報や知識等、幅広い側面において影響力をもつ領域であるため取り扱う領域や文献数は多い。すでに社会学や保健医療・教育など幅広い分野で調査研究が存在するため、本研究グループでは最終年度に行う際にメディアを含めた具体的な政策提案を行うのであれば、それを前提に具体的に改善が可能な領域とその根拠となる分野・テーマに関連する調査研究を中心に検討を行うことがひとつの課題になると思われる。

■表1 男女のコミュニケーションを規定するキーワード

キーワード	問題設定・介入ポイント・因子	文献検討
【Norm】 その地域、時代の文化・価値・伝統	コミュニケーション阻害因子・リスク 促進因子の解明 新しい行動モデルや価値の提案	態度調査 調査対象の比較 期待されるロールモデル（文化人類学的検討）
【ジェンダー】	男女のコミュニケーション、より望ましい行動変容を難しくしている因子の解明 Gender Sensitive なプログラムの開発と実践	実践報告（効果評価？）
【政策／プログラム】	国内の保健医療統計をベースとした国家プラン 国際機関や会議報告の影響を受けての新しい政策の運用	政策の変遷プロセス・比較分析 予算構造の変化
【学校教育】	公教育における位置づけと内容	ガイドライン分析 比較分析
【専門家の態度】	Sexual Issue を扱う専門家の態度と研修	知識・態度分析・研修プログラム効果評価
【コミュニケーションスキル】	問題認知、リスク軽減、意思決定、グループワーク、構造化面接	プログラムの効果評価・方法論
【メディア】	性についての情報入手ルート、男女お	

	よび人間関係をテキスト/コンテキスト分析、メディアを活用したキャンペーン/プロモーション	
--	--	--

2. 方法論

取り組むべきコミュニケーションの問題設定を行った上で次に検討されるのはその方法論および効果であるが、これについてはたとえば発達心理学・認知心理学・学習理論等、数多くの理論が存在する。このため、本研究でのアプローチは「どの対象に」「どの方法論を用いて」「どのような具体的な内容で」実践すると「どのような改善が得られる/得られると期待できる」のかという視点での検討が重要になる

と思われる。

たとえば、HIV/AIDS 予防の領域においては、モデル地域を限定し、予備調査から具体的な介入として学校教育プログラムの中で予防行動モデルの提示が行われているが、そのモデル授業は「Stage of Changing Model」「Social Learning Theory」に基づいて構成されている（2002, 木原）。方法論の検討のためにはこのようなサンプル事例の横断的な検討を行う必要があると思われる。

■表2 方法論 プログラム運営者のためのマニュアルにおけるキーワードの例

Policy Development	施設・地域における指針
Building Skill	発達段階にあわせたライフスキル獲得
Self-esteem, Self-efficacy	対象のエンパワーメントを目的としたアプローチ
Responsibility	役割・行動モデルの提案とプロモーション
Risk Reduction	リスク認知と回避方法
Peer Counseling, Peer Education	対象別ピアアプローチ
Parent-Child communication	性の健康について親子の会話を促す
First time Session	はじめての子どもの妊娠出産する親への関わり
Empowering women's health	女性が積極的なコミュニケーション、ネゴシエーションをとっていくためのスキル獲得
Helping men's health	男性に対する役割期待・価値からくる健康リスクを改善するプログラム
Capacity Building	対象となる個人および専門家、組織のもつ潜在能力の拡大

3. より詳細な文献検討の方向性

本研究において検討すべき文献はある一定の方向性をもって限定されてくるが、その際にどの分野を中心に進めていくかが今後継続する上でひとつのポイントとなる。ここでは初年度の段階で担当者の関心領域および最終年度に実際に提案可能なテーマとして「親と子のコ

ミュニケーション」「ジェンダーに着目したプログラム」「より若年層へのアプローチ」について触れたい。

1) 親と子のコミュニケーション促進

一般に性に関連する情報を扱う際に、「門番 (gate keeper)」と呼ばれるグループは全国各地域に存在する。それらは宗教や政治から対象

に直接かかわる親教師まで様々である。ここでは学校教育は子どもの健康を守る立場での情報および技術獲得の支援を行う機関と定義し、あえて限定して取り組むテーマとして親のかかわりを取りあげたい。

キーワードとしては、問題共有・ロールモデル・問題発生時の援助要請行動の促進をあげておく。

(参考文献)

Kaiser Family Foundation, Communication; A Series of National Surveys of Teens about Sex, 2002

Miller KS et al, Patterns of condom use among adolescents: the impact of mother-adolescent communication, Amer J Public Health 1998;88,1542-44

Holzman D et al, Parent and peer communication effects on AIDS-related behavior among high school students, Fam Plann Perspect 1995; 27; 235-40

Nolin NJ, et al, Gender difference in parent-child communication about sexuality, J Adoles Research 1992;7:59-79

2) ジェンダーに着目したプログラム実施と評価

わが国において特記すべきことは、基礎教育の就学率や識字率における男女差がなく、昨今の女性の社会進出などからある世代においては経済的な格差も以前のそれほど大きくない側面もある。そのような中で、性の健康を危うくする男女のコミュニケーションにはどのようなものがあり、どのようなものが困難因子・促進因子として働いているのかを検討することは今以上の状況の改善のために必要な作業と思われる。

女性のバルネラビリティ、女性をリスクへおいやる社会のメッセージ、男性であること、ジ

ェンダーロールへのチャレンジ、ステレオタイプの認知、新しい Norm の提案等がキーワードとしてあげられる。

なお、国際的なレベルでは、北京会議においてジェンダー問題の認知が高まり、2000年度の国連エイズ合同計画(UNAIDS)が提唱した「Men Make a Difference」に代表されるように、プログラムの中にジェンダーへの配慮を要求するプログラム/予算構造になってから、各国における実践報告は増加傾向にある。男女のコミュニケーションについて検討を行う本グループにおいてもこの領域についてのさらなる検討を行うことが有効と思われる。

UNFPA, Reaching Young Men and Boys Family Health Initiative, Gender Stereotypes Compromise Sexual Health, 2002

Rivers K, et al, Working with Young Men to Promote Sexual and Reproductive Health, London, Department for International Development, 2002

Gupta P, et al, Leadership, Responsibility and Men's Partnership with Women to Improve Reproductive Health, : A Case Study Prepared for the Men and Reproductive Health Subcommittee of USAID Gender Working Group, 2001

3) より若年層への性教育プログラムの実施・プロモーションとその内容

意思決定、方法選択、影響因子について

現時点においても情報や知識の提供としての性教育は各発達段階において実践されているのであるが、その時期や内容は地域や学校によってばらつきが大きい。しかし、実際に性の健康がお脅かされている状況のキーワードに「若年化」があり、より早期に情報提供を行うことの重要性が指摘される一方で、教育分野においては、禁欲教育の推進を中心とした

gatekeeper による情報コントロールの働き
かけも決して小さくない。より早期にかかわる
ことの有効性、およびそれはリスク行動の促進
にならないことなどを実証的に検討したうえ

で、提案に盛り込むことが有効と思われる。

(参考文献)

SIECUS, Toward a Sexuality Healthy America
2001

「男女間のコミュニケーション・スキルの向上に関する研究」に関連した

文献検討

町浦美智子（大阪府立看護大学）

1. はじめに

青少年の性行動の活発化¹⁾に伴い、十代の望まない妊娠、それに引き継ぐ人工妊娠中絶が増加傾向²⁾にある。このような現象の背景には妊娠や避妊に対して正しい知識がない、避妊方法は知っていても確実に実行できていないなどが考えられる。これは十代で妊娠した女性の6割は避妊をしたと答えているものの、実際は避妊に失敗した結果、妊娠したという報告³⁾からも明らかである。また、低用量ピルが解禁になったとは言え、その利用者が当初の予想に反して増加しないのは服薬することへの抵抗感や避妊に対して女性の主体性が発揮されていない現実を反映しているとも言える。さらに、わが国では性に関する話はタブーとされる面があり、パートナーと性・セクシュアリティや避妊について話をする機会が少ない、あるいはまったくしていないとも予測される。

わが国ではパートナーとどの程度性・セクシ

ュアリティについて話をしているのかという実態調査はほとんど見当たらない。このような状況から、今回は海外の文献を中心に、性・セクシュアリティに関するコミュニケーションの実態、および性・セクシュアリティに関する男女間のコミュニケーションを向上させるような健康教育プログラムの実践状況を検討した。

2. 文献検索方法と結果

文献はデータベース MEDLINE（1967～）、Pro Quest（CINAHL Database with Full text, 1986～）を用いた。Keywords は sexual relationship、interpersonal communication、communication skills とした（表1）。The Cochrane Library についてもこれらのキーワードで検索したが、結果は0件であった。そこで、Adolescent & (sexual & (behavior & communication)) のキーワードで検索したが、適切な文献は見当たらなかった。

表1. 文献検索結果

Keywords	MEDLINE	Pro Quest	計
Sexual relationship & Interpersonal communication	(47件) ⇒ 9件	(15件) ⇒ 2件	11件
Sexual relationship & Communication skills	(29件) ⇒ 4件	(38件) ⇒ 8件	12件

表1の⇒で示した文献数の計23件から14件を実際に検討した。これらに加えて親子間の性に関するコミュニケーションについて検討した論文⁴⁾から13文献を対象とした。最終的に文献検討の対象となった27文献の内容は次のよ

うに分類された。

- ・性的予防行動に関連する因子4件（表2）
- ・男女間の性に関するコミュニケーション5件（表3）

・親子間の性に関するコミュニケーション
16件 (表4, 表5)

①コミュニケーションの内容やタイプ
(7件) ②子どもの性に及ぼす影響 (9件)

・健康教育プログラム (介入プログラム)
2件 (表6)

この文献検討ではあとで親子間のコミュニケーションに関する文献を追加したために、このテーマに関する文献が必然的に多くなっている。

3. 性的予防行動に関連する因子 (表2)

ここでは性に関する予防行動、つまり性感染症 (Sexually Transmitted Infections; 以下 STI) を予防するためにコンドームを使用するという行動と、対人関係スキルや避妊やセーフセックスに関するコミュニケーションとの関連を研究している文献を表2にまとめた。コンドームを使用する頻度が高い女性は Moore ら⁵⁾の研究では HIV 感染のリスクをより感じていて、さらにパートナーと HIV に関する会話をしていた。Cobb⁶⁾の研究でもセーフセックスについてのコミュニケーションと性的予防行動との間に最も高い相関がみられ、それと同時に一般的なコミュニケーションや自己開示も有意に関連していた。また、コンドームの使用を最も予測できる構成概念を決めるためにコミュニケーションと assertiveness (自己主張の強さ) を調査した研究⁷⁾では、コンドームに対する態度が肯定的なときのみ性に関する assertiveness はコンドームの使用を予測していた。そして、コンドーム使用と性に関するコミュニケーションもコンドームに対する態度が肯定的なときのみ正の相関がみられた。ところが、この研究では一般的な assertiveness が高いからと言って性に関する assertiveness も高いとは言えない、対人関係のコミュニケーションがうまくいっても、性的に assertive とは限らないことも指摘された。

一方、コンドームの使用頻度が少なくなるの

は、パートナーと愛情が深まり、交際期間が長くなる場合⁸⁾やパートナーからの否定的な反応を予測した場合⁵⁾であった。

4. 男女間の性に関するコミュニケーション (表3)

男女間の性に関するコミュニケーションでは女性のみを対象とした調査^{9) 10)}と高校生、大学生、そして 20 代前半にある男性・女性を対象とした調査^{11~13)}に分けられた。

1) 女性を対象とした調査

まず 14 歳から 26 歳の女性を対象に性に関する自己主張 (sexual assertiveness) の程度を調査した研究⁹⁾では、“私は～する権利を持っている”という形式の 13 の質問を尋ねていた。この研究では約 20%の女性が、パートナーに対してセックスを拒否する、STI 検査歴を聞く、あらっばすぎるという権利はないと答えていた。黒人やヒスパニックの女性は白人の女性より STI 感染や望まない妊娠を予防する権利を持っていない、18 歳から 21 歳の女性は年上の女性より STI 検査歴を尋ねることができない、と思っていた。また学歴や過去のパートナーの数、避妊の実施程度、性的被虐待経験なども性に関する自己主張と関連していた。特に性的被虐待経験のある女性は性行為について自己決定できる権利がないと思っていた。

グラウンデッドセオリー法を用いて 31 人のラテンアメリカ人女性にインタビューした研究¹⁰⁾では、セーフセックスについて話し合ったか、どのように話し合ったかを聞き、セクシュアリティに関する経験と意味を検討していた。コアカテゴリーとして“Reconciling Message” (メッセージを調和させる) が抽出された。これは自分の価値システムに合うメッセージを受け入れ、信念とは違うと感じるメッセージを拒絶し、恋愛関係の内と外の両方で性的な自己と決断を受け入れるために、メッセージを変化させたりするプロセスであった。また、素直であることは性的行為や避妊法などについてパートナーと

活発に交渉することにつながり、気楽さは性的関係の交渉に対する自信につながっていた。

2) 男性・女性を対象とした調査

思春期男女を対象にした研究¹¹⁾では、対象者は概ね自分の好みを主張し、性の問題について他人と話し合える自信を持っていた。しかし、強要された性経験をもつ男子高校生はセーフセックスの話をパートナーとすること、パートナーに話を聞いてもらうことに難しさを感じていた。

思春期後期にある男女を対象に、グラウンデッドセオリー法を用いてパートナーとの性的リスク行動に関するコミュニケーションをどのように受け止めているかを記述した研究¹¹⁾では、“信頼の確立”がコアカテゴリーとして抽出された。女性にとっては、信頼の確立に必要な条件はケアリング関係とパートナーに関する情報を集めることであったが、男性ではケアリング関係と本能を使うことであった。一般的に女性の方からセーフセックスの話を始めていた。また、パートナーを長く知っているほど信頼するようになり、安全でないセックスをすることで信頼を示したり、パートナーがSTIに感染していないと信頼するようになっていた。

また、初回性交時の避妊法について話し合うことを妨げるものは何かを面接により調査した研究¹²⁾では、対象者の多くはパートナーと避妊について話し合っていたが、リスクのある性交は話し合いがないまま行われていることが多かった。避妊についての話し合いは3分の1が難しいと感じており、女性の方がよりそのように感じていた。その原因はパートナーの反感あるいは否定的な反応への心配であった。つまり避妊について話すことはセックス願望を認めること、STI感染の可能性、複数の性パートナーの存在を心配することにつながっていた。しかしながら、コンドームの使用について話すパートナーは思いやりがあり、礼儀正しいと受け止められていた。パートナーの反応に影響する因子はパートナーの評判、個人の評判、関係を長く

続けたいという願望であった。

5. 親子間の性に関するコミュニケーション (表4・表5)

親子間の性に関するコミュニケーションはコミュニケーションの内容やコミュニケーションのタイプを調査した研究^{14)~20)}と、親子間の性に関するコミュニケーションが子どもの性に及ぼす影響を調査している研究^{21)~29)}に分けられた。対象は子どものみ、両親と子ども(娘・息子)、両親と娘、母親と娘、母親と子ども(娘・息子)、母親のみ、とさまざまであった。

1) コミュニケーションの内容やタイプ (表4)

親子間の性に関するコミュニケーションの内容は、主に性情報の伝達や性に対する価値観や禁止行動¹⁴⁾、身体的な発達や性や生殖に関する危険¹⁸⁾、AIDS、HIV、STIについて¹⁹⁾であったが、マスターベーションや夢精などについて話すことは少ない傾向^{17)~19)}にあった。性の話のしやすさを両親と子どもの性別でみると、同性同士(男子は父親と、女子は母親と)のほうが話をしやすいと答えていた^{15) 19) 20)}が、父親と母親を比較すると母親と性の話をしやすい^{15) 20)}と感じていた。

Hepburn¹⁴⁾は家族の性的社会化におけるコミュニケーションのレベルと称して、子どもの発達段階に応じて家族内で話す内容が異なってくることを示した。Baldwin¹⁶⁾らは両親と子どもを対象に家族内の相互作用パターンと家庭で行われている性教育の量との関係を調査したところ、家族関係に満足している子どものほうが家庭内で性教育を受けており、バランスのとれた家族の父親はバランスの悪い家族の父親よりも性教育に関与していた。

母親がとらえている思春期の子どもとの性に関するコミュニケーションのスタイル、内容、頻度を調査した研究¹⁸⁾では、30人中5人がオープンで親密にさまざまな話をすると答えていたが、9人の母親は子どもと性について話したいと思っているがあまり話ができておらず、話

をするきっかけを探していた。きっかけがあれば身体的な発達への対処やセックスに対する責任について話していた。子どもから話し始めるのを待つ母親（7人）は、子どもの話に応じて性的欲求、望まない性行為への対処について話をしていった。

2) 子どもの性に及ぼす影響（表5）

一般的に親が性の話をオープンにしたり、母親と避妊の話をしている場合、子どもが避妊する確立が高く^{21) 23) 27) 29)}、リスク行動の頻度が低いとする研究²⁶⁾と、親子のコミュニケーションと子どもの知識や態度、避妊法の選択とは有意差がないとする研究²²⁾があった。しかし、母親の態度や価値観は子どもの性行動に影響を及ぼしており^{25) 28)}、母親が婚前性交に反対していると思っっていることは性行動を抑制したり、母親と避妊の話をするほどに性交を始める確率が高かった²⁵⁾。また、母子の会話を録画した後に母子別々に質問紙に答えて、1年後にフォローアップした研究²⁸⁾では、信念と価値観についてより長く話した母親の子どもは、1年後の性行動が少ない傾向にあった。

6. 健康教育プログラム（表6）

Gomezら³⁰⁾はラテン系移民女性を対象にして性的リスクの減少に焦点をあてたプログラムを実施し、その後3ヶ月、6ヶ月とフォローしてHIVリスク行動に与える影響を評価した。プログラムに参加した結果、性についての話しやすさ、性に関する気楽さの得点は上昇し、話しやすさのレベルの高かった女性は最近のセックスでコンドームを使用していた。

また、ランダム臨床試験（Randomized Clinical Trial）により異性カップルを対象に関係性をベースにした介入効果を検証した研究³¹⁾では、HIV予防が目的ではあるが、リスク行動の認知、リスクの低い行動を減らす、実際に行動する、そして変化させた行動を維持することに焦点をあてて介入していた。この研究の理論的ベースは Theory of Reasoned Action（道

理に基づいた行為）、Social Cognitive Theory（社会認知理論）、Health-Belief Approaches（健康信念アプローチ）を統合したものを用いていた。217カップルのうち、59%が全セッションに参加した。その結果、関係の力に焦点をあてる、コミュニケーションに焦点をあてる、選択肢を広げるという介入は多くのカップルにとって効果的であった。例えば、パートナーとセーフセックスについて話し合う能力が強化され、積極的な聞き手になる方法を学んでパートナーに聞いてもらえ、リスクを減少させる行動に選択肢があるということ学んだ経験はカップルにとって大きなメリットであった。

7. 考察

以上のような文献検討の結果を踏まえて、研究対象・方法に関すること、男女間のコミュニケーションに影響する因子について考察し、さらにわが国で男女間のコミュニケーション・スキルを向上させるための取り組みについて考えてみたい。

1) 研究対象及び研究方法

今回検討した27文献はほとんどが思春期を対象としたものであったが、なかには成人女性あるいは異性カップルを対象にした研究もみられた。性的なコミュニケーションに関する調査研究をする場合、女性だけ、あるいは男性だけを対象とすると、性的なコミュニケーションの実態が断片的にとらえられがちになると考えるので、やはりカップルを対象に同時に調査するという方法をとれば、より現実的なデータが得られるのではないかと思われる。

調査方法では明らかに横断的実態調査研究が多く、縦断的な研究は数少なかった。また、内面的な実情を把握するためにグラウンデッドセオリー法を用いた帰納的質的研究もみられた。健康教育プログラムでは1件のみ実験研究が試みられていたが、介入効果の評価方法については参加者の意識的な変化だけではなく、行動変容につながったのかという視点で評価するため

には介入後の長期フォローアップスタディが必要になってくる。Evidenced Based Practice を目指すためには、理論に基づいた介入方法および介入効果の評価方法についての検討を重ねる必要がある。

2) 男女間の性的コミュニケーションに影響する因子

男女間の性に関するコミュニケーションの内容は、研究目的が HIV 予防のためのセーフセックスに主眼がおかれているために、コンドーム使用や避妊法についてパートナーと話すことができるか、性的な自己主張の程度や、実際パートナーとどの程度話をしているかが中心であった。その中で sexual assertiveness と一般的な assertiveness は関係していない、パートナーの否定的な反応を予測するためにコンドーム使用や避妊法について話ができない、信頼関係が成り立つとセーフセックスについてあまり話し合わないなど、意識・感情面の影響が大きかった。これらのことから、まず誰でも性に関する自己決定の権利を持っているというリプロダクティブヘルス/ライツの考え方を啓発していくことが重要である。そして男女間の性に関するコミュニケーションを促すには、感情に左右されずにコンドーム使用や避妊法について話すことを肯定的に受け止められるようなコミュニケーション・スキルを身につける必要があると言える。

次に親子間での性的なコミュニケーションを促進するものは同性の親子間でのコミュニケーション、親の性的な話に対するオープンさや肯定的な受け止めであったことから、親に対する介入も重要であることが指摘された。親が積極的に自己開示し、オープンに話をすることで、子どもが親の性に対する価値観・態度を学び、子ども自身が自分の性行動をコントロールできるようになるという関連性がみられた。わが国でも山地らの研究^{3,2)}において、母娘間ではあまり性に関する会話がされていないが、母親が性に対して肯定的なイメージを持っていることが、性に関する会話を促進させる要因であることが

明らかになっている。このことは子どもを対象にした教育と併せて、親に対する教育、介入も検討していかなくてはならないことを示唆している。

3) わが国で男女間のコミュニケーション・スキルを向上させるための取り組みへの示唆

海外における文献検討や考察を踏まえて、わが国ではどのような取り組みができるのか考えてみたい。まず、山地らの研究^{3,2)}を除いてはあまり実態調査が行われていないことから、実態調査を実施すべきであろう。これはすでに本分担研究でも実施されているので、その結果は今後の取り組みに向けて有用な検討資料になると思われる。

次に前項でも述べたように親から子への知識、価値観、態度の伝承を考えると、親と子どもへの教育を併行させながら、カップルへの教育も視野にいれるべきであろう。現在子どもはカリキュラムに沿って性教育を受ける機会があるものの、性行動の実態を考えると十分に効果があるとは言えないが、親やカップルに対する教育も重要視されなければならない。親の性に対する価値観、態度が肯定的であるような教育、介入が求められる。日常生活のなかで性に対する会話、意識が自然と育まれていくためには子どもの成長に伴う働きかけが望ましい。子どもが思春期になったからと言っていきなり家庭で性教育が始まるわけではない。親から子への性教育は出生直後から始まることを認識し、「健やか親子 21」の方針に沿って、妊婦への教育も充実していくべきであろう。

カップルへの教育は AIDS 予防などのキャンペーンにとどまることなく、避妊や STI 予防について気軽に相談できるように医療システムに組み込んでいくことも検討していきたいものである。さらにコミュニケーション・スキルをトレーニングするプログラムの開発等が望まれる。

8. おわりに

なぜ避妊や性感染症を予防するための行動が

現実化していかないのかという根底には性に対する否定的な見方、態度があることが明らかになった。このような捉え方を変容させていくためには親から子への性教育をこれまで以上に推進し、また男女間のコミュニケーション・スキ

ルをトレーニングしていく必要性が示唆された。これらの課題が今後実践化されていくことで、結果的に望まない妊娠や人工妊娠中絶、性感染症が減少することを期待したい。

引用文献

- 1) 東京都幼稚園・小・中・高・心障性教育研究会：2002年調査 児童・生徒の性。学校図書、2002。
- 2) 厚生労働省児童家庭局母子保健課監修、母子衛生研究会編集：母子保健の主なる統計平成13年度刊行。母子保健事業団、東京、2002。
- 3) 北村邦夫ほか：Ⅱわが国の十代女性の性、妊娠、避妊、出産に関する現状調査。『望まない妊娠防止対策に関する研究』pp.160-179、平成7年度厚生省心身障害研究報告書「望まない妊娠の防止等に関する研究」、1997。
- 4) 本間裕子：家庭における性教育に関する文献検討。大阪府立看護大学紀要、7(1)、91-98、2001。
- 5) Moore, J., Harrison, J.S., Kay, K.L., Daren, S., & Doll, L.S.: Factors associated with Hispanic women's HIV-related communication and condom use with male partners. *AIDS Care*, 7(4), 415-427, 1995.
- 6) Cobb, B.K.: Communication types and sexual protective practice of college women. *Public Health Nursing*, 14(5), 293-301, 1997.
- 7) Zamboni, B.D., Crawford, I., & Williams, P.G.: Examining communication and assertiveness as predictors of condom use. *AIDS Education and Prevention*, 12(6), 492-504, 2000.
- 8) Civic, D.: The association between characteristics of dating relationship and condom use among heterosexual young adults. *AIDS Education and Prevention*, 11(4), 343-352, 1999.
- 9) Rickert, V. I., Sanghvi, R., & Wiemann, C.: Is lack of sexual assertiveness among adolescent and young adult women a cause for concern? *Perspective on Sexual and Reproductive Health*, 34(4), 178-183, 2002.
- 10) Faulkner, S. L. & Mansfield, P. K.: Reconciling messages: The process of sexual talks for Latinas. *Qualitative Health Research*, 12(3), 310-328, 2002.
- 11) Anderson, V., Reis, J., & Stephens, Y.: Male and female adolescents' perceived interpersonal communication skills according to history of sexual coercion. *Adolescence*, 32(126), 419-427, 1997.
- 12) Lock, S. E., Ferguson, S. L., Wise, C., & Kennedy, C. W., et al.: Communication of sexual risk behavior among late adolescents. *Western Journal of Nursing Research*, 20(3), 273-294, 1998.
- 13) Coleman, L. M. & Ingham, R.: Exploring young people's difficulties in talking about contraception: How can we encourage more discussion between partners? *Health Education Research*, 14(6), 741-750, 1999.
- 14) Hepburn, E. H.: A three-level model of parent-daughter communication about sexual topics. *Adolescence*, 18(71), 523-534, 1983.
- 15) Bennett, S. M.: Family environment for sexual learning as a function of fathers' involvement in family work and discipline. *Adolescence*, 19(75), 609-627, 1984.
- 16) Baldwin, S. E., & Baranoski, M. V.: Family interactions and sex education in the home. *Adolescence*, 25(99), 573-582, 1990.
- 17) Nolin, M. J., & Peterson, K. K.: Impact of the family on the sex lives of adolescents. *Journal of Adolescent Research*, 7(1), 59-79, 1992.

- 18) Rosenthal, D. A., Feldman, S. S., & Edwards, D.: Mum's the world: Mothers' perspectives on communication about sexuality with adolescents. *Journal of Adolescence*, 21(6), 727-743, 1998.
- 19) Miller, K. S., Kotchick, B. A., Dorsey, S., Forehand, R., & Ham, A. Y.: Family communication about sex: What are parents saying and are their adolescents listening? *Family Planning Perspectives*, 30(5), 218-222, 235, 1998.
- 20) DiIorio, C., Kelley, M., & Hockenberry-Eaton, M.: Communication about sexual issues: Mothers, fathers, and friends. *Journal of Adolescent Health*, 24, 181-189, 1999.
- 21) Newcomer, S. F., & Udry, J. R.: Parent-child communication and adolescent sexual behavior. *Family Planning Perspectives*, 17(4), 169-174, 1985.
- 22) Fisher, T. D.: Parent-child communication about sex and young adolescents' sexual knowledge and attitudes. *Adolescence*, 21(83), 517-527, 1986.
- 23) Mueller, K.E., & Powers, W. G.: Parent-child sexual discussion: Perceived communicator style and subsequent behavior, *Adolescence*, 25(98), 469-482, 1990.
- 24) Pick, S., & Palos, P.A.: Impact of the family on the sex lives of adolescents. *Adolescence*, 30(119), 667-743, 1998.
- 25) Jaccard, J. , Dittus, P.J. , & Gordon, V. V.: Maternal correlates of adolescent sexual and contraceptive behavior. *Family Planning Perspectives*, 28(4), 159-165, 185, 1996.
- 26) Dutra, R. , Miller, K. , & Forehand, R.: The process and content of sexual communication with adolescents in two-parent families: Associations with sexual risk-taking behavior. *AIDS and Behavior*, 3(1), 59-66, 1999.
- 27) Whitaker, D. J., Miller, K. S., May, D. C., & Levin, M.: Teenage parents' communication about sexual risk and condom use: The importance of parent-teenager discussions. *Family Planning Perspectives*, 31(3), 117-121, 1999.
- 28) Romo, L. F., Lefkowitz, E. S. , Sigman, M., & AU, T. K.: A longitudinal study of maternal message about dating and sexuality and their influence on Latino adolescents. *Journal of Adolescent Health*, 31, 58-69, 2002.
- 29) Stone, N., & Ingham, R.: Factors affecting British teenagers' contraceptive use at first intercourse: The importance of partner communication. *Perspectives on Sexual and Reproductive Health*, 34(4), 181-197, 2002.
- 30) Gomez, C. A., Hernandez, M., & Faigales, B.: Sex in the new world: An empowerment model for HIV prevention in Latina immigrant women. *Health Education and Behavior*, 26(2), 200-212, 1999.
- 31) El-Bassel, N., Witte, S. S., Gilbert, L., & Sormant, M., et al.: HIV prevention for intimate couples: A relationship-based model. *Families, Systems & Health*, 19(4), 379-395, 2001.
- 32) 山地佳代、白石裕子、松浦賢長：家庭における性教育の可能性に関する研究－女子高校生とその母親との関係および性に関する会話についての質問紙調査より－. *母性衛生*, 43(4), 549-554, 2002.

表 2. 性的予防行動に関連する因子

著者 (発表年) : タイトル	目的	対象	方法	結果の概要
Moore, J., et al. ⁵⁾ (1995) : Factors associated with Hispanic women's HIV-related communication and condom use with male partners	1) 安定した関係にある女性が男性パートナーと HIV について話したり、パートナーに性行動を変えよう求めたりする程度を調べる。 2) HIV やセーフセックスに関するコミュニケーションとコンドーム使用との関係について調査した	女性 (ドミニカ人 44 名, プエルトリコ人 54 名, メキシコ人 91 名) 平均年齢 30 歳	構成的面接・質問紙調査 : 社会・人口統計学的特性, 文化変容, 過去 6 ヶ月の性行動とコンドーム使用, 関係の特性, HIV のリスク, 主な男性パートナーとの HIV に関するコミュニケーション, コンドーム使用を要求したときの予期されるパートナーの反応	<ul style="list-style-type: none"> • HIV 感染のリスクをより感じている, パートナーとオープンなコミュニケーションをしている女性のほうが, HIV に関する問題をパートナーと話していた。 • パートナーからの否定的な反応を予測した女性で, コンドーム使用頻度は低かった。 • HIV に関する会話はコンドーム使用とわずかに関連していた; HIV に関する会話をしてきた女性の方がコンドームを使用していた。 • 年齢が上の女性の方がコンドームを使用していなかった。
Cobb, B.K. ⁶⁾ (1997) : Communication Types and Sexual Protective Practices of College Women	若い女性とその新しい性的パートナーとの対人コミュニケーションのタイプと, 性的予防行動の病気の予防行動との関係を明らかにする。	米国南東にある大規模な大学の 3 つの寮にすむ性経験のある女性 (18~22 歳) 163 名	クローズドエンド質問紙調査 : 年齢, 人種, 性経験, 性に関する経歴 The Information Seeking scale (Kellermann & Reynolds, 1990) The Sexual Self-Disclosure scale (Herold & Way, 1988) : SSSDS The Sexual Self-Disclosure scale (Herold & Way, 1988) : SSSDS 性に関する病気の予防実践	<ul style="list-style-type: none"> • セーフセックスについてのコミュニケーションと性的予防行動が最も相関が高かった。しかし, 一般的なコミュニケーションや自己開示とも有意差はあった。 • 性的予防実践の予測因子は, セーフセックスに関するコミュニケーションのみだった。
Civic, D. ⁸⁾ (1999) : The association between characteristics of dating relationship and condom use among heterosexual young adults	ヘテロセクシャルな大学生のコンドーム使用における関係性因子の個々の相関と独立した多変量効果を検討する。	1996 年 1 月~3 月, 太平洋側の北西部にある大規模な公立大学で実施 18~25 歳の未婚の大学生 210 名; 女性 126 名 (60%), 男性 84 名 (40%) 平均年齢 : 20.3 歳	cross-sectional 自記式質問紙法 : コンドームの使用 (従属変数), Sternberg Triangular Love Scale (Sternberg, 1988), Dyadic Trust Scale (Larzelere & Huston, 1980) 交際期間, 関係性のタイプ, HIV/STD 感染リスクの認識, 避妊方法, 過去の性体験歴, 人口統計学的情報	<ul style="list-style-type: none"> • より高レベルの愛, より長い交際期間, より真剣でコミットした関係であるほど, コンドーム使用は少なかった。 • 交際期間だけがコンドーム使用を予測する因子だった。 • ホルモンによる避妊法はコンドーム使用と負の相関があり, 関係性因子とコンドーム使用間の相関を仲介していた。若者は愛情が高まり, よりコミットした関係になってくると, ホルモンによる避妊法に変える傾向がある。

著者(発表年): タイトル	目的	対象	方法	結果の概要
Zamboni, B.D., et al (2000): Examining communication and assertiveness as predictors of condom use	コンドームの使用を最も予測できる構成概念を決めるためにコミュニケーションと assertiveness を測定し、このような関係の仲介因子 moderator を調べ、結果をより安全な性行動の理論に結びつける。	米国中西部の大学に1997年に在籍していた大学生 227名; 女性(64.8%), 男性(35.2%), 平均19.97歳	自記式質問紙法: The Interpersonal Communication Inventory (Bienvenu, 1976) The Sexual Communication Inventory (Bienvenu, 1980) The 30-item Rathus Assertiveness Schedule (Rathus, 1973) The 38-item Sexual Risks Scale (SRS) (DeHart & Birkimer, 1997) The 20-item form of the Marlowe - Crowne Social Desirability Scale (MCSDS) (Strahan & Gerbasi, 1996) The HIV Self Efficacy Scale (Smith et al, 1996) Sexual Activity Scale (SAS)	<p>結果の概要</p> <ul style="list-style-type: none"> ・性に関する assertiveness はコンドームの使用を予測する。 ・対人間のコミュニケーションと性に関わるコミュニケーション、一般的な assertiveness と性に関わる assertiveness, 性に関するコミュニケーションと一般的な assertiveness, 性に関するコミュニケーションと性に関わる assertiveness, 対人間コミュニケーションと一般的な assertiveness は相関関係にあった。 ・コンドームに対する態度が肯定的なときのみ、コンドーム使用と性に関するコミュニケーションは正の相関があった。 ・コンドームに対する態度が肯定的なときのみ、コンドーム使用と性に関わる assertiveness は正の相関があった。 ・高いレベルの規範的信念と自己効力はコンドーム使用と関連があった。

表3. 男女間の性に関するコミュニケーション

著者 (発表年) : タイトル	目的	対象	方法	結果の概要
Anderson, V., et al. ¹¹⁾ (1997): Male and female adolescents' perceived interpersonal communication skills according to history of sexual coercion	思春期男女の性的抑圧の経験と、対人間コミュニケーションおよび心理的状態について調査する。	18歳以下の女子61名 (1993年5月中旬～7月中旬) にかけて、私立の家族計画クリニックにて) 9学年～12学年の男女183名 (女子54%, 男子46%) (郊外にある私立高校にて)	質問紙調査: 交際関係、デート中にあった経験に関する質問、心理的問題、性的関係/コミュニケーション	<ul style="list-style-type: none"> ・対象者は概ね自分の好みを主張し、性の問題について他人と立ち向かえる自信を持っていた。 ・強要された経験を持つ男子高校生 (20名) はセーフ・セックスの話をパートナーとすると、パートナーに話を聞いてもらうこと、セックス前のアルコールやドラッグを断ることにむずかしさを感じていた。また、これらの男子は授業の欠席あるいは学校でのトラブルをもち、アルコールやドラッグの使用に気がかりをもち、自分は人気がないと思っていた。
Lock, S. E., et al. ¹²⁾ (1998): Communication of sexual risk behavior among late adolescents	思春期後期の男性と女性がどのようにパートナーとの性的リスク行動に関するコミュニケーションを受け止めているかを記述する。	米国南東部の公立大学生; 男性14名, 女性18名 男女の平均年齢: 19歳	面接調査 (グラウンデッド・セオリー): セックスをしようとする意志決定した時について; パートナーとのバースコンドロール、過去のパートナー、STDsや静注ドラッグの使用についての話し合いについて; どのように会話の中でこれらの話題が持ち上がったか、何が話し合いをやさしくあるいは難しくしたか	<ul style="list-style-type: none"> ・コアカテゴリーは「信頼の確立」 ・女性にとっては、信頼の確立のための必要条件是ケアリング関係とパートナーに関する情報を集めることであった。 ・男性にとつての必要条件是ケアリング関係と本能を使うことだった。 ・ふつう女性からセーフ・セックスの話が始めるが、いったん会話が始まると、男性は話し合うことをいとわなかった。 ・セーフ・セックスの話をするために飲酒、過去の性経験、生殖・避妊・性的リスク行動に関する知識、友だちとの会話、メディアが介在していた。 ・多くの参加者が安全でないセックスをするこ とによって、パートナーに対する信頼を示していた。 ・パートナーを長く知っているほど、パートナーのことを信頼するようになり、STDs感染していないとより信頼するようになっていた。

著者 (発表年): タイトル	目的	対象	方法	結果の概要
<p>Coleman, L. M., et al.¹⁸⁾ (1999): Exploring young people's difficulties in talking about contraception: how can we encourage more discussion between partners?</p>	<p>若者が新しいパートナーとの最初の性交の前に、避妊法について話し合うことを妨げる障害を述べることにより、パートナー間でのコミュニケーションを調査する。</p>	<p>英国南部 女性 43名, 男性 13名: 19名の女性 (クリニック), 18名の女性と10名の男性 (ユースクラブ), 6名の女性と3名の男性 (アドバイスセンター) 年齢: 16歳~19歳</p>	<p>面接調査 (1997年6月~12月): 参加者がパートナーと初めて性交したときのこと; 最近の特定のパートナー (FIRSP) および/または最近の“一夜限りの相手” (FIRONS) との最初の性交について 避妊法; その性交を取り巻く問題に関する詳細; 個人の情報 (年齢, 性別, 自己効力, 自己のコントロールなど); 相互作用またはパートナーに関する情報 (パートナーの年齢, 最初の性交の始まり, 性交の予期理由, 避妊に関するコミュニケーション, プレッシャーや説得); 状況あるいは文脈の問題 (性交の場所, 飲酒または薬物使用など)</p>	<p>・そのパートナーとの初めての性交直前に話し合うことの方が多かった。 ・リスクのある性交は、話し合いが行われなかった時によく起こっていた。しかし、前もって話し合っていた場合でも、5分の1は起こっていた。 ・3分の1が避妊について話し合うのは難しいと感じていた。女性の方がより感じていた。 ・パートナーの反感あるいは否定的な反応への心配が、難しいと感じる主な理由だった。 ・避妊について話すことは、セックスしたいと認めることだと思っていること、パートナーがSTDに感染している可能性があると同時に、過去に多くの性パートナーがいたかもしれないとほのめかすことになるので、否定的な反応を予測していた。 ・パートナーの反応の重要性に影響する3つの因子は、パートナーの評判、個人の評判、関係を長く続けたい願望だった。 ・パートナーが話し合いを始めたら、対象者の大多数は肯定的な反応をすと答えた。 ・コンドーム使用について話すパートナーは思いやりがあり、礼儀正しいと受けとっていた。 ・コンドーム使用に否定的な反応を示すパートナーは敬意が不足しており、パートナーとして価値がないと考えていた。</p>